

新しい時代を拓く大切なものの見方、考え方を提言する「くだけかけ」

悩みや苦しみにへの理解

人生に手遅れなし(相模原くだけかけ会にて)

和田重良

◆どうにも
わかってもらえない

くだけかけ会では「十四歳講座」という講座を長年続けています。講師はほんのりですが運営は開催地の会員の皆さんがやっています。くり返し「十四歳講座」をやっているうちに三つのテーマに仕上がって来ました。それは「人生」「自分」「おとなになる」というテーマです。

どうしてこの三題が「十四歳」なのか?と不思議な気がするでしょうけど、「悩める十四歳」そこから出発」という本を出すキッカケになったのは、当

時「相談の電話」や来所の人たちの悩みや苦しみがあつたからです。同時に思春期の不登校や非行や神経症の子や若者達との「共同生活」の実践の中から見えてきたテーマでもあります。

ほくはいわゆる教師ではありませんから、「子どもや若者の悪い所を直してやろう」という気は初めっからありませんでした。ですから、共に悩み、苦しむ…なんて言うとかッコイイのですが、それでもなく、「人生の悩みや苦しみの本質って何なのだろう?」といつしよに探究する道を選択して来たのです。いわゆる「同行」だと後で知りました。

そうすると、この三つのテーマは自然と深まって行くのです。「これこそ出発点だ」と確信し、ここを押して行けば「何歳からでも、十四歳の時に出席するテーマに迫って行ける」と考えているのです。

人の悩みや苦しみに他者には「わかってもらえない」という感想を持ちます。言葉や文字で表現しても表現しきれない「何か」がどこかに潜んでいるのです。

昔、父と散歩中に、父が「同情も愛情のうちだがね」とポツリと言ったので、その言葉が心の隅に残りました。ほくは23歳か24くらいだったと思います。裏を返せば「同情は愛情ではない」と受けとれます。そこが、「どうにもわかってもらえない」という感想につながるのだと思います。同情だけしてもらっても本当には満たされないので。

◆例えば「不登校」の苦しみ

「不登校」ほど「どうにもわかってもらえない」苦しみはありません。不登校やひきこもりのように「フツ」の人ができているのに「…」と言われる、学校へ行くことや、社会に参加することができないのですから、当事者も親もとても悩み苦しむのです。どうも、病気や貧乏の悩み苦しむとは少し違うよ

うな気がします。どちらかと言えば似ているのは「依存症」でしょうか。それでも単純な拘泥とも別モノです。外から見たらどうにもスッキリしない人達なのです。

それでも、人々はその苦しみをわかってあげようとして、挙句の果てに当事者ももつと苦しんでしまうような「ムリな親切や、ムダな思いやり」の押しつけ」をしてしまうことだつて多いのでしよう。

この問題は「学校へ行けば解決なのか?」という根元的な問いかけを含んでいます。

実はこれには、人間として「ほんとに生きるってこととは何だ」という問いが含まれているからです。ほくの出席して来た人たちは例外なく、みんな(誰もが)行きたい(生きたい)と願っているのです。なのに行けない、生きにくいのですから、親子共々、不安のドン底となる「学校」や「社会」って何モノなのだ?と疑問に思うのが当然です。

他の悩みや苦しむも「人生の意味を問う」ことになりませんが、他人からは、理解することのできにくいものであるのです。

◆理解を越えれば

よくやる対策として、「簡単な楽なものからならす(慣れさせる)」というやり方があります。これで効果の上ることもありますが、ほくの所に来るまでのうちにそんなことはやり尽くして来た人が多いのですから、その程度では悩みや苦しみが解決しない人が多いのです。

そして、楽しいことをさせる。好きなことをさせる。という方法も思いつきます。でも、楽しいことや好きなことはするのであつてさせるものではありません。

そこで混乱してしまう原因のヒントが見えて来ます。「させる」というのは、悩みや苦しみを「理解できる」という前提に立っているのです。思いつくのは「方法」であり、根元的な「方向」ではありません。させる「方法」は当りハズレがあるのです。では、「悩みや苦しむ」への理解を越えて行く道があるのでしょうか。

「悩んだつてしょうがない」なんて気楽な方向づけから、「苦しむなんてことはしなくていいのよ」なんていうノンキな方向づけというのがあります。そういう気楽やノンキになれない人には、「悩みや苦しむの本質を知る」という確実な方向があるので

◆「生活の向きを変える」

「くだけかけ」で提唱しているのは「悩みや苦しむ」のドン底にいて、なおかつまだ底無しと感じているのであれば「生活の向きを変えよう」ということです。

そもそも、「生活」というのは「自己変革の連続」なのです。「生活」そのものが大切なものは明らかです。「くだけかけ生活舎」(山の家)に来て下さるのが手つとり早いのですが、ご自宅でも十分にできることです。

「わかってもらいたい」「わかってあげたい」といふ情のほたるきは認めざるを得ませんが、「十四歳講座」の「人生」「自分」「おとなになる」の三つのテーマの中に、悩みや苦しむを越えて行く「生活」のヒントがあると思います。

やはり、せつかく生きていくのであれば、根元的なテーマを得て正しく悩むという方向で生きていきたいのです。無闇に悩んでも苦しいばかりです。ふと気がつけば、ほくら人間にはもつと根元的なテーマがあるのですから。ぜひ「十四歳講座」を一度はお聴き下さい。(そのうちDVDかCDにしてお伝えできるようにしたいと思います)



和田重良(くだけかけ会代表)
誰もがあんしんしてその人らしく生きること
を願い、35年以上にわたって青少年や家庭の
生活にさまざまなメッセージを送りつけて
いる。「両手で生きる」「子ども版人生タネ
本」「いのちの満足」など著書多数。NHK
テレビ・ラジオ深夜便「こころの時代」、テ
レビ静岡制作「テレビ寺子屋」などに出演。



和田重良（くだけけ会代表）

誰もがあんしんしてその人らしく生きることを願い、35年以上にわたり青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送りつづけている。「両手で生きる」「子ども版人生タネの本」「いのちの満足」など著書多数。NHKテレビ・ラジオ深夜便「こころの時代」、テレビ静岡制作「テレビ寺子屋」などに出演。

新しい時代を拓く大切なものの見方、考え方を提言する「くだけけ」

悩みや苦しみへの理解

和田重良

人生に手遅れなし（相模原くだけけ会にて）

◆どうにも

わかってもらえない

くだけけ会では「十四歳講座」という講座を長年続けています。講師はほくなのですが運営は開催地の会員の皆さんがやって下さっています。くり返し「十四歳講座」をやっているうちに三つのテーマにしほられて来ました。それは「人生」「自分」「おとなになる」というテーマです。

どうしてこの三題が「十四歳」なのか？と不思議な気がするでしょうけど、「悩める十四歳　そこから出発」という本を出すキッカケになったのは、当

時「相談の電話」や来所の人たちの悩みや苦しみがあつたからです。同時に思春期の不登校や非行や神経症の子や若者達との「共同生活」の実践の中から見えてきたテーマでもあります。

ほくはいわゆる教師ではありませんから、「子どもや若者の悪い所を直してやろう」という気は初めっからありませんでした。ですから、共に悩み、苦しみ…なんて言うとかっこイイのですが、それでもなく、「人生の悩みや苦しみの本質って何なのだろう？」といっしょに探究する道を選択して来たのです。いわゆる「同行」だと後で知りました。